

金色の麦の穂

ぎんやんま 兵庫県

移ろいゆく人の世とは対照的に、永遠と変わらずに輝き続ける夜空の星。人は星を見て何かを想い、何かを願う、そしてそこに人生の記憶を辿るのだろうか。

「あの星にはきっと誰か住んでいるような気がするの。あれがきっとスピカだわ」

君が指さす先には白く輝く星があった。

「たぶん人間よりももっと高度な文明があるはずよ。どんな病気でも治せるような進んだ宇宙人がいると思うの」

そう言う君の横顔が寂しく微笑む。夕食も終わり静かになった病室で、僕はうなずきながら不器用にリンゴの皮を剥いている。

君と初めて出会ったのは大学2年の春、僕が友人に誘われて軽音楽部に入った時だった。大学会館の奥にある練習室には既に5-6人の学生が集まっていて、君はテーブルの隅っこに座っていた。僕は楽譜から目をあげた君に軽く会釈をして、その隣に腰掛けた。君は恥ずかしそうに、「こんにちは」と返すと、もう一度楽譜に目をやった。その日から、僕は毎日のように練習室に通うようになり、夕方までギターを弾いて過ごした。他にこれとって用事のなかった二人は、練習室で過ごす時間も長くなり、親しくなるのにそう長くはかからなかった。今思えば、東京という都会に馴染めない二人にとって、自然の成り行きだったのかもしれない。

軽音楽部は練習場所こそ学校から提供されていたものの、運営資金は全てメンバーの部費に頼っていた。唯一、毎月開催していたライブで集まるわずかな収益を、夏の合宿（というより夏の旅行といった方が良いが）の軍資金に充てるのが慣わしだった。そしてこの年の夏は、信州の高原への合宿が予定されていた。

「夜空で一番明るい星はね、シリウスという星なんだって。でも私はおとめ座だからスピカっていう星が私の守り星なの」

その夜、君は高原の夜空を見つめながら珍しく星の話 시작했다。

「そうなんだ」

「スピカはね、おとめ座が左手に持っている麦の穂先で輝く1等星なの。だからこの麦の穂のしおりが私のお守り」

楽譜にはさんでいた金色に輝くしおりを僕に見せながら君は続けた。

「おとめ座はギリシャ神話のデーメテルという女神をかたどったものなのよ。デーメテルは

五穀豊穡の神様なんだって。彼女は罰を受けていて、1年のうちの4ヶ月は闇の世界で過ごさなきゃならないの。彼女がいない4ヶ月間が地上の冬で、その間は作物も育たないっていうわけ」

広い草原の丘で、手の届きそうな星を眺めながら明け方まで君と語り合ったことを、昨日のことのように覚えている。僕には星のことは分からなかったけど、楽しそうに星の話をする君の横顔を見ているだけで幸せだった。

あの頃は、僕の人生の中でも一番充実した日々だったのかもしれない。大学の講義にはあまり顔を出さなかったけど、好きな音楽に没頭し、気の合う仲間たちがいて、そして君がいた。毎日が充実した日々だった。

後輩の新歓コンパで酔いつぶれた君を、下宿まで送って行ったこともある。

いつもは一方的に話す君なのに、さすがにその時は冗談を言う気力もなく、静かに僕の腕に抱えられて歩いた。下宿まで歩くのが精いっぱい、君がベッドに倒れこんだのを確認すると、僕もその場で気を失うように眠ってしまった。次の日は、二日酔いでフラフラしながら、昼近くに二人でモーニングを食べに行っただけ。

「日本酒とワインを飲んだのが原因ね」熱いレモンティーを揺らしながら君が言う。

「両方飲んだのが原因じゃなくて、単に飲み過ぎなんだよ」

「だけど、この前の合宿では明け方まで飲んだけど、平気だったわ」

「あの時は時間をかけて飲んだからね。昨夜はペースが速すぎた」

「そうかもね。でも後で出てきたワインは美味しかったわ」

きゃしゃな割にお酒は強く、いつも最後まで残らずにいられない性格だった。今考えれば、あんな無茶をしていたことも、君の体に多少影響していたのかもしれない。

その楽しい日々も、3年生の冬になる頃から状況が変わり始めた。

君は疲れたからといって練習を休む日が増えてきた。4年になると講義にも出られなくなり、下宿にこもって休む日が多くなった。僕は講義が終わってから、そのまま君の下宿に見舞いに行くことが日課になった。

「どうだい調子は」

「今はまだけど、午前中は体がだるいのよね。そうすると何もしたくなくなるの」

「一度ちゃんとした病院で診てもらいなよ」

「もうすぐ夏休みだから、実家に帰った時にじっくり診てもらおうわ」

「それがいい、じゃあ残念だけど今年の合宿には一緒に行けそうにないね」

「ごめんね。でも、それまでにすっかり治るかもしれないから、そうしたら一緒に行くわ」

「無理しない方がいい。今年の夏は実家でゆっくりと過ごした方がいいよ」

彼女と下宿で話をしたのは、それが最後となった。

翌日、階段の踊り場で倒れていた彼女は救急車で運ばれた。後から聞いた話では、高熱を出して生汗をかきながらブルブル震えていたらしい。友人からの知らせを聞いた僕は、講義にも行かずに病院に飛んで行った。

「大丈夫か。倒れたんだって？」

「心配かけてゴメン、もう大丈夫だから。下宿の大家さんが大げさだから救急車を呼んだの」

「でも良かったじゃないか大事に至らずに。早く病院に行けっていう神様の計らいだよ」

「そうかもね」

「この機会に、ちゃんと先生に診てもらった方がいい」

昼には心配した両親が仙台から上京してきた。簡単に自己紹介を済ませた僕は、後のことを両親に任せて病室を出た。午後からも講義はあったが大学に行く気にもなれず、そのまま練習室にこもって暗くなるまで無心にギターを弾き続けた。

「手をかざすだけで病気が治せたり、目を合わすだけで会話ができたり、きっと人間にはない能力があるはずよ」

君がそう話す横で、僕は剥き終わったリンゴを切り分け、お皿に乗せて枕元においてやる。

「そんな宇宙人がいたら今すぐ助けに来て欲しいね。でも人間の医学も進んでいるからきっと治せるよ。実家に帰ったら東京より空気はいいし、食べるものも新鮮だから回復も早いはずだ」

長引きそうな入院に、彼女の両親は仙台の病院への移送手続きを進めていた。うまくベッドの空きがあり、来週からは仙台に移れることになったそうだ。彼女に付き添える最後の週、僕は今年の合宿をあきらめ、彼女のそばにいることにした。

「本当はね、仙台には帰りたくないの。あなたのギターも聴けなくなるし、友達にも会えなくなるから。それに向こうに行ったらここには戻って来れないような気がするの」

「大丈夫だよ。夏休みの間にしっかり治して、また戻ってきなよ」

「もし私が帰って来なかったら、その時は、あの星を見ながら“星に願いを”を弾いてね。そしてたらきっと私のところに届くから」

彼女が言うように、僕には彼女が戻って来ないような気がしていた。そう簡単に治る病気じゃないことは、両親の彼女に対する接し方を見ていれば感じる。彼女もそのことをうすうす感じて

いたのだろう。

「あの星は1年前に高原で見た時と同じね。でも、私は1年前とは違うし、来年はどうなっているか分からない」

悲しい目をしてつぶやく君の横で、僕は食べ残したリンゴのお皿を片付け始めた。熱くなった目頭を君に感づかれそうだったから。

その年の夏は、いつも以上に気温が高く雨が少なかった。このまま渇水が続けば、米の作柄状況も例年より悪化するらしい。今年はデーメテールも元気がないのだろうか。

彼女が仙台に帰ってからのというもの、僕は生きる張り合いを失い、何をする気力も無くなっていった。練習にもほとんど顔を出さなくなった。クラスの話話は就職の話で一色だというのに、それが自分とは別の世界のように感じていた。

就職先の決まっていないのが僕を含めて数人になった頃、さすがにあせりを感じた僕は、ようやく就職活動を始めることにした。動き始めたのが遅かったことと不況のせいで、求人は少なくかなり厳しい状況だった。都内の有名企業を10社以上回ったが良い反応は得られず、仕方なく地元の企業にも活動を広げることにした。そして夏休みが終わりに近づいた頃、ようやく地元にある不動産屋から内定をもらった。

本当は都内にある家電メーカーか旅行代理店が希望だったが、田舎暮らしも悪くはないな。両親の面倒も見なきゃいけないし、仕事も楽そうだし、このあたりで妥協しておくか。自分なりに言い訳を考えて、僕の短い就活は終わりを迎えた。

彼女の両親から手紙が届いたのは、それから2ヶ月が経った頃、秋風が街路樹を黄色く染め上げた頃だった。そこには彼女が最後まで苦しむことがなかったことと、世話になった僕へのお礼の言葉が書かれてあった。そして彼女のお守りだった麦の穂のしおりが同封されていた。

就職先も決まったし、もう大学などどうでも良かった。卒業単位が取ればすぐにでも地元に戻ろう。彼女と過ごした思い出を胸に。

翌年の春、僕は初めての給料を使って思い出の高原を訪れることにした。もう5月だというのに、高原の夜風は涼しさを通り越して寒い。

いつか君はこの場所で、隣に座って星の話をしてくれたね。君と共に過ごした日々は、僕の人生の中で一番輝いていた、紛れもない青春だった。君の人生には、あの2年間がどんな風に刻まれたのだろうか。

高原の風のように、さわやかに僕のそばを吹き抜けていった君を思いながら、約束だった“星に願いを”を爪弾く。

ギターの音色は風に乗って白樺林に吸い込まれ、その上には1年前と変わらないスピカが輝いている。ギターの先では金色の麦の穂が揺れていた。